事例No.	3020
公表年度	R6
団体の属性	町村
団体名	和歌山県みなべ町

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・副業・兼業活用 ・地域運営組織

事例種類	官民連携の取組

事例内容・タイトル

和歌山県みなべ町（梅収穫ワーケーション）

出典

地域づくり人材の養成に関する調査研究会（第2回）

事例７　和歌山県みなべ町（梅収穫ワーケーション）　その１

団体	和歌山県みなべ町
外部人材	島田由香氏（一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会：PCW Japan）　※外部人材：自治体（地域）外から地域づくりに携わる人材
外部人材活用の分類	□①活動局面を限定（例：研修講師等）　□②継続的な関わりを持ちながら活用（関係人口化）　■③内部人材化（移住・定住）し、活用
活動範囲	□所在市区町村内全域　□所在市区町村内一部地域　□複数市区町村　■その他【みなべ町を中心に他地域でも活動】
活動の頻度、期間	令和４年４月～
人材支援制度の活用	□有　■無
キーワード	＃梅収穫ワーケーション　＃ワーケーション　＃梅ワー　＃南高梅　＃世界農業遺産　＃一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会（PCW Japan） ＃一次産業ワーケーション　＃官民地域連携　＃ブリッジ人材　＃　＃ウェルビーイング　＃　＃自治体間交流　＃関係人口

◎概要

みなべ町の特色は、①「みなべ・田辺の梅システム」は世界農業遺産（GIAHS）認定（平成27年12月15日）、②全国一の梅の産地（収穫量：全国の約30％）で、その約８割がブランド梅の南高梅。ただ、６月の梅収穫期は繁忙期のピークを迎える。そこで、梅農家の課題解決を目指し、都会から労働力確保する「梅収穫ワーケーション」を実施。令和６年で３年目を迎える。またその他にも一次産業とワーケーションを組み合わせたプログラムを展開することで人手不足や過疎化の課題解決のきっかけを作り、参加者には非日常体験を提供しウェルビーイングの向上を図っている。スタート時点から「町の有志による自走」であったが、国や自治体からの助成・補助に頼ることなく継続的な開催により関係人口の拡大にもつながっている。

■活動開始に至る経緯

和歌山県みなべ町は、紀州灘に面した人口11,000ほどの小さな町である（令和２年）。そのうち農家が３～４割、就業人口の約８割が何らかのかたちで梅にかかわる。みなべ町を島田由香氏（外部人材）が初めて訪れたのは、令和３年12月20日。みなべ町有志（梅農家や町民、近隣の市議・市職員など）に囲まれた懇親会の席が「梅収穫ワーケーション（通称：梅ワー）」誕生の場となった。

■活動による成果や影響

○令和４年「梅ワー」１年目の参加者数は、コロナ禍のさなかにもかかわらず123人。それが３年目の令和６年には400人近くに上り、受入農家も１年目の11軒から19軒にまで増えた。また、島田氏の人脈の一環から、世界的なアパレルデザイナーのコシノジュンコ氏が梅ワーTシャツを手がけている。

○ふるさと納税は、コロナ明けなど梅ワー以外の様々な要因が考えられるが、令和５年度は令和２年度の倍以上となった。「梅ワー」は町のPR、関係人口の増加に貢献し、さらに地域の活性化を目指している。

事例７　和歌山県みなべ町（梅収穫ワーケーション）　その２

■外部人材が活動するための取組・支援（みなべ町）

○官民地域連携で取り組む「梅ワー」は行政主導型ではなく、島田氏をはじめとする運営サイド（一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会）とみなべ町の農家、町民有志が主体である。和歌山県やみなべ町は情報共有やサポート的な支援を行うにとどまったが、それが功を奏して官民地域連携の良好な関係が構築できた。

■成果・好影響が得られた要因（島田氏）

○「地域の人々（当該事例では梅農家）」（「A人材」と言う）と「地域に関心を持つ地域外の人（＝島田氏）」（「C人材」と言う）がうまくつながるには、「地域の外側に関心を持つ地域の人々」（「B人材」と言う）の橋渡しが重要となる。

○「梅ワー」では、長年守り続けてきた大切な梅をみなべ町以外の人間に任せることになる。「この人は信用できる」というB人材からA人材への声掛け（橋渡し）がなければ梅農家（A人材）は動かなかっただろう。先述した懇話会に参加した町民の多くがこのB人材であり、彼らは首都圏や他県で暮らした経験があり、外からの視線で「みなべ町の魅力」を再認識することができ、すぐに「なんか面白そう」と盛り上がって話が進んだ。外部人材が地域で活動する中でB人材の存在は非常に重要であると言える。

○先の懇話会に参加していた梅農家を兼ねる20代の青年町議が、2年後の町長選に出馬。令和６年９月29日、全国２番目に若い32歳の新町長の誕生となった。職員に「自分の思ったことを提案してほしい。誰も提案しない状況は駄目」と、職員の声を今後の政策・施策等に反映していく方針を示した。「梅ワー」の延長線上に新たに生まれて来るものを増やし、「そこに自分も関わりたい」という職員や町民が増えることが期待されている（みなべ町）。

■展望と課題

○一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会（PCW Japan）は、農林水産業で行うワーケーションを「一次産業ワーケーション®」と位置づけ、「もうギャグかと思うくらい」（島田氏）の軽妙な感覚で農林水産物とワーケーションの掛け合わせに取り組んでいる。すでに三重県が事業化を支援し、昨年（令和５年）から御浜町「みかん収穫ワーケーション（通称：みかワー）」がスタートし、今年３月から尾鷲市「甘夏ワーケーション（通称：甘ワー）」、10月には蓮台寺柿の伊勢市で「柿ワーケーション（通称：柿ワー）」が始まった。林業では石川県能登町の「きこりワーケーション（木こワー）」、漁業では和歌山県すさみ町では「ウツボ漁ワーケーション」も行っている。今後、これらワーケーション地域の農家同士の交流やワーケーションのPRを兼ね、投稿し合える「ネットの中の家」のようなものを構想中（島田氏）。

○現在は、「地元事業者のネットワークが生み出すスピード感」（島田氏）と、人材支援制度や企業連携などの活用も視野に入れることで、より一次産業ワーケーションの広がりが期待される（研究会）。